

## 第一話 ご主人様に自分の全てを

「ご主人様……明日は早いですか？」

黒いシルクのネグリジェを纏い、アンティーク調のベッドの奥に鎮座する優雅な中年男性は、自分の膝の上でぬいぐるみのようにもたれかかっていた少年の顔が突然こちらを向いたことに気づいた。

少年の頬は熱を帯び、瞳はキャンドルの光を映して濡れている。その濡れた顔を覆い隠すように優しく撫でる男の指先には、常に微かな支配の力が込められている。

「こうして撫でられるだけじゃあ、もう嫌になったかい？」

男は高価なウイスキーの微かな香りを纏わせながら、意地の悪い冗談を囁き、少年の小さな顎を優雅にくすぐる。少年はぷうっと頬を膨らませ、男にぴたりと体を密着させた。

「ご主人様。約束して下さったじゃないですか。僕が誕生日を迎えたら、この貞操を奪って下さるって……ずっと、この日のためだけに生きてきたんですよ」

その声には、強い決意と、長年の夢が今にも叶うという熱い期待が織り交ぜられていた。

「楽しみにしていた？ そうか……そう言ってくれて嬉しいよ。私の言いつけを、いい子に守ってくれていたかい？」

男が問うと少年は、呼吸を整えた。

「ええ……」

少年は、恥じらいと決意を滲ませながら、震える指先をネグリジェの下履きに這わせる。ゆっくりと、まるで全てを捧げる儀式のような動作に、男は息を飲んだ。

少年のまだ何も知らない忠誠の幹は、淡い桃色に染まり、ピンと力強くそそり立っている。蜜がべっとりとまとわりつき、てらてらと光るそれを、少年は一瞥したのち、男を真っ直ぐ見つめた。